新渡戸稲造『武士道』における道徳体系について

On the Ethical System in Nitobe Inazo's *Bushido*

笠井　哲
福島工業高等専門学校、一般教科
Akira Kasai
Fukushima National College of Technology, Department of General Education

(平成20年9月22日受理)

The purpose of this paper is to consider the ethical system in Nitobe Inazo's *Bushido*. As for the Bushido, similarity with the chivalry of Europe is accepted. Nitobe thought that the Bushido strongly influenced power of the Japanese ethics whereas chivalry had declined. The Bushido is noblesse oblige, namely duty with high social position of the samurais who was a privileged class. It was the Japanese original ethical system which assumed Buddhism, Shinto, Confucianism the origin.

Key words: ethical system, Bushido, chivalry, noblesse oblige

1. はじめに

旧5千円札の肖像で知られる新渡戸稲造（1862－1933）は、岡倉天心（1862－1913）[1]と同様に、幕末に生まれまもなく明治を迎えた後、日本で初めて近代的な高等教育を受けた知識人の一人であった。内村鑑三、坪内逍遥、森鴎外、夏目漱石も同世代である。彼らに共通しているのは、いずれも欧米人教師から直接、西欧の学芸文化を学び、世界への目を開かれると同時に、そこから振り返って日本を見つめようとしたことである。

盛岡南部藩士の三男として生まれた新渡戸稲造は、祖父が始めた開拓事業を引き継ぐため、1877（明治10）年、開かれて間もない札幌農学校（現在の北海道大学）に、15歳で入学した。キリスト教に入信すると同時に、コスモポリタン的な理想を抱くようになった。

農学校卒業後は、農政学を専攻するために東京帝国大学へ進学するが、この時の面接試験で将来の志望を聞かれた際に、「われ太平洋の橋とならん」という生涯のモットーとなる言葉を述べたといわれるエピソードは有名である。

1884（明治17）年にはアメリカに渡り、さらに1887（明治20）年からはドイツに移って勉学研究を続け、1891（明治24）年に帰国すると、母校で教えるなどした。やがて多忙から体調を崩し、1898（明治31）年にアメリカに渡って、しばらく静養生活を続けた。この機会を利用して、欧米人に日本文化を啓蒙する目的で書かれたのが、本稿で取り上げる『武士道』である。この書は、次の17章から構成されている。

第1章　道徳体系としての武士道
第2章　武士道の淵源
第3章　義
第4章　勇・敢為堅忍の精神
第5章　仁・惻隠の心
第6章　礼
第7章　誠
第8章　名誉
第9章　忠義
第10章　武士の教育および訓練
第11章　克己
第12章　自殺および復仇の制度
第13章　刀・武士の魂
第14章　婦人の教育および地位
第15章　武士道の感化
第16章　武士道はなお生くるか
第17章　武士道の将来

本稿の目的は、「第1章　道徳体系としての武士道」を中心に、新渡戸稲造の『武士道』における道徳体系について考察することである。

2. 『武士道』の成立

道徳体系を考察する前に、『武士道』の成立について述べておきたい。著者・新渡戸稲造は、熱心なキリスト教徒であり、東京帝国大学教授や東京女子大学学長を歴任した真摯な教育者であり、国際連盟事務局次長として世界的な活躍をした人であった。

なぜ、こういう人が日本の伝統的な「武士道」について書いたのであろうか。さらにいえば、この本は原題を *Bushido , The Soul of Japan* といい、アメリカから英文で発刊されたものである。なぜ、英文で発刊されたのであろうか。

新渡戸が卒業した札幌農学校といえば、「少年よ、大志を抱け！」で有名なクラーク博士が、教頭として赴任していた学校である。プロテスタントの敬虔な信者であったクラークは、専門の植物学よりもキリスト教に基づく人格教育に重きをおき、彼が残した「イエスを信じる者の誓約」には多くの生徒が署名した。

もちろん新渡戸も、それに感化されてキリスト教徒になるのであるが、彼は二期生であったので、入学した時、すでにクラークは帰国していて面識はない。同期に、明治キリスト教の先駆者となった内村鑑三もいる。

それではなぜ、彼らはキリスト教に入信したのであろうか。一見不思議であるが、実はプロテスタントの根本精神は、質素倹約を旨として、自律・自助・勤勉・正直をモットーにする「自己の確立」を養成するものであった。それは武士道の人格形成と相通じるものがあった。彼らはこのことを理解すると、武家社会が崩壊し「主君」がいなくなった今、その代わりとして「神」という新しい主を得たのである。その相異は、武士道には「神」と「聖書」がなかったことである。

この点で、岬龍一郎が新渡戸稲造は、

> 成文化されていない武士道を、「日本人の精神」としてとらえ直し、日本人のための日本人による道徳規範の書、すなわち「和製聖書」を書こうとしたのではないか、と私は見ている[2]。

と述べているのは正鵠を射ている。というのも新渡戸は、『武士道』を執筆した動機について、第一版の「序」において、次のように書き出しているからである。

> 約十年前、私はベルギーの法学大家故ド・ラヴレー氏の歓待を受けその許で数日を過ごしたが、ある日の散歩の際、私どもの話題が宗教の問題に向いた。「あなたのお国の学校には宗教教育はない、とおっしゃるのですか」と、この尊敬すべき教授が質問した。「ありません」と私が答えるや否や、彼は打ち驚いて突然歩を停め、「宗教なし！　どうして道徳教育を授けるのですか」と、繰り返し言ったその声を私は容易に忘れえない[3]。

当時新渡戸は、この質問に愕然とし、すぐに答えることができなかった。なぜならば、彼が子どもの頃に学んだ道徳の教えは、学校で習ったものではなかったからである。そこで彼は、善悪や正義の観念を形成している様々な要素について分析してみてはじめて、そのような観念を吹き込んだものが「武士道」であったことに気がついたという。

このエピソードは、新渡戸が明治政府の派遣留学生としてドイツに滞在していた明治20（1887）年、26歳の時のことである。やがて10年後に、新渡戸は病気療養のためカリフォルニア州に滞在する。これは外国から日本を見つめ直す絶好の機会であった。

当時の日本は、文明の先進国である欧米諸国から見れば、いまだアジアの果てのきわめて幼稚な国でしかなかった。しかしその日本が日清戦争で「眠れる獅子」といわれた清国に勝ったことから、一躍注目されることになった。しかしそれは、「野蛮で好戦的な民族」という評価である。

そこで新渡戸は、日本人を正しく理解してもらうために、外国人に向かって日本人の伝統的な精神を「武士道」の名において集大成した。だからこそ彼は、『武士道』を英語で書いたのである。

3. 武士道と騎士道の類似性

さて『武士道』の第１章は、次のような書き出しで始められている。

> 武士道はその表徴たる桜花と同じく、日本の土地に固有の花である。それは古代の徳が乾からびた標本となって、我が国の歴史の押し葉の中に保存せられているのではない。それは今なお我々の間における力と美との活ける対象である。それはなんら手に触れうべき形態を取らな

いけれども、それにかかわらず道徳的雰囲気を香らせ、我々をして今なおその力強き支配のもとにある自覚をせしめる。それを生みかつ育てた社会状態は消え失せて既に久しい。しかし昔あって今はあらざる遠き星がなお我々の上にその光を投げているように、封建制度の子たる武士道の光はその母たる制度の死にし後にも生き残って、今なお我々の道徳の道を照らしている。ヨーロッパにおいてこれと姉妹たる騎士道が死して顧みられざりし時、ひとりバークはその棺の上にかの周知の感動すべき讃辞を発した。いま彼バークの国語〔英語〕をもってこの問題についての考察を述べることは、私の愉快とするところである[4]。

原著のタイトルにも、本章のタイトルにおいても Bushido というローマ字が使われているが、引用文の「武士道」は、原著で chivalry である。新渡戸は、しばらくの間 chivalry という英語で武士道を説明する。Chivalry は、一般に「騎士道」と訳される。後で新渡戸自身によって、「武士道」と「騎士道」とが同じでないことを説明するのであるが、『武士道』が対象にした欧米人の読者は、いきなり Bushido と書かれるよりも、彼らの知識の中にある chivalry と書かれる方が、わかりやすかったのであろう。

ともあれ、武士道は桜と同様に日本の象徴であり、それはしかし、押し葉のように過去の標本のようなものでなく、新渡戸世代の日本人の中に生きているのである。つまり、武士道は無形ではあるが、我々の道徳を力強く支配しているのである。

武士道の光は、「今なお我々の道徳の道を照らしている」と新渡戸はいう。これに対して、先の引用の終わりの部分に書かれているように、ヨーロッパの騎士道（chivalry）は、このときすでに「死して顧みられざりし」の状態にあった。

武士道の姉妹たる騎士道は、中世ヨーロッパにおいて、キリスト教の影響を受けながら発達した騎士特有の気風を示すものである。そして主としてフランス、ドイツ、イギリスの三国で12世紀以降、騎士道物語が栄えるのであるが、それも15世紀半ばに衰退してしまっていた。

セルバンテスが17世紀初頭に発表した『ドン・キホーテ』は、『聖書』に次ぐベストセラーといわれるほど世界的に読まれ続けられている古典的な小説である。この長編物語こそ、セルバンテスが「死して顧みられざりし騎士道」の棺の上に、渾身の気持ちを込めて発した讃辞のように思える。

ドン・キホーテは行く先々で、騎士のばからしさ加減をいやというほど思い知らされ、読者も笑い転げるのである。しかしセルバンテスは、騎士、騎士道そのものを否定したわけではない。棺の中に入ってしまい「顧みられざりし」真の騎士道は、かくあるべきだという理想を逆説的に描いたのである。

新渡戸は、また次のようにもいう。

極東に関する悲しむべき知識の欠乏は、ジョージ・ミラー博士のごとき博学の学者が騎士道もしくはそれに類似の制度は古代諸民族もしくは現代東洋人の間に嘗て存在しなかったと、躊躇なく断言していることでも解る。しかしながらかかる無知は恕すべき点が大である。何となればこの善き博士の著書の第三版は、ペリー提督が我が国鎖国主義の戸を叩きつつあった同じ年に発行せられたのであるから。その後10年以上を経て我が国の封建制度が最後の息を引き取ろうとしていたころ、カール・マルクスはその著『資本論』において、封建制の社会的政治的諸制度研究上の特殊の利便に関し、当時封建制の活きた形はただ日本においてのみ見られると述べて、読者の注意を喚起した。私も西洋の歴史および倫理研究者に対し、現在日本における武士道の研究を指摘したいと思う[5]。

ここで述べられているような欧米人の極東に関する知識の欠乏は、現代においても一部の学者や政治家を除けば、それほど変っていないであろうと考えられる。それだけに当時にあっては、新渡戸が『武士道』を「太平洋の橋」となるために著した意義は大きいのである。

4. 武士道と騎士道の相異性

新渡戸稲造はまた『武士道』において、「騎士道」と「武士道」について次のようにも述べている。

私が大ざっぱにシヴァリーと訳した日本語は、その原語においては騎士道というよりも多くの含蓄がある。ブシドウは字義的には武士道、

すなわち武士がその職業においてまた日常生活において守るべき道を意味する。一言にすれば「武士の掟」、すなわち武人階級の身分に伴う義務である。かく字義を明らかにした以上、これから原語でこの語を用うることを許してもらいたい。原語をしようすることはまた別の意味からも都合がよい。このように截然として独自的であり、得意なる考え方と性格の型を生み出し、かつこれほど地方的なる教訓は、その特殊性の徽章を面上に帯びておらねばならない。それ故、民族的特性を極めて顕著に表現する二、三の語は国民的の音色をもつのであって、最善の翻訳者といえどもその真を写しだすことは困難であり、場合によっては、積極的に不当不正を加えることさえなきを保し難い。誰かドイツ語のゲミュートの意味を、翻訳によりて善く現わしえようか。英語のゼントルマンとフランス語のジャンティオムとは、言語的には極めて近接している。しかしこの二つの語のもつ持ち味の差を、誰か感じないであろうか[6]。

新渡戸はここで chivalry と horsemanship という二つの英語を使用している。Horsemanship というのは、「馬術家としての技術、能力、腕前、作法」であり、chivalry（騎士道）の一要素に過ぎない。日本語の「武士道」に対し、便宜的に chivalry という英語をあてたのである。

騎士道と武士道との決定的な違いを挙げるとすれば、それは女性に対する態度である。

騎士の第一の条件は、女性崇拝にある。騎士は常に思い姫を胸中に抱き、その理想の高貴の女性に対して命をも惜しまない勇気をもっていることが必要なのである。したがって、かのドン・キホーテは

まず、何代か昔の先祖の古鎧をさがしだして、これを掃除したり、兜に厚紙で面をとりつけたりした後、飼い置きの痩馬にロシナンテという立派な名をつける。それから、自分も騎士らしく、ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャと名乗ることにしたものの、最後に全身全霊を捧ぐべき思い姫が入要なことに気付いて、思案のあげく、あまり遠くないエル・トボーソという村に、アルドンサ・ロレンソなる小奇麗な百姓娘がいたことを思いだし、これをわが思い姫ときめて、ことわりもなく、名をドニャ・ドゥルシネーア・デル・トボーソと変えてしまう[7]。

のである。女性に対する態度に関する限り、日本の武士の場合は騎士たちと全く逆である。日本の武士道に「女の影」がさすことは全くない。それどころか、女に心を動かすことなどは、武士の風上にもおけないのである。

以上のように、武士道と chivalry は、類似してはいるが、決してイコールではない。したがって、この後の叙述において新渡戸は、「武士道」に対して chivalry という英語をあてるのが不適切であると考えた。そこで彼は、「武士道」に Bushido をあてるのである。

さらに、新渡戸は翻訳一般の限界についても触れている。ただし、本稿筆者はフランス語の素養がないので、英語のゼントルマンとフランス語のジャンティオムの二つの語の持ち味の差は理解できないので深入りしない。

このようなことは、新渡戸稲造一人にとどまらない。彼と同時代人である九鬼周造（1888－1941）や和辻哲郎（1889－1960）も、同様の問題意識を持っていた。九鬼は『「いき」の構造』において、

例えばフランス語の ciel とか bois とかいう語を英語の sky, wood, ドイツ語の Himmel, Wald と比較する場合に、その意味内容は必ずしも全然同一のものではない。これはその国土に住んだことのある者は誰しも直ちに了解することである。（中略）自然現象に関する言葉でさえ既にかようであるから、まして社会の特殊な現象に関する語は他国語に意味の上での厳密なる対当者を見出すことはできない[8]。

といっている。また和辻も『風土』において、

「沙漠」という言葉は通例“desert”の同義語として用いられる。自分もその用語例に従って、この言葉によりアラビア、アフリカ、蒙古等に存するきわめて特殊な風土を言い現わそうとするのである。しかし「沙漠」と“desert”が本来著しく意味を異にする言葉であることは、これらの言葉の意味を反省した人の直ちに気づくところであろう。（中略）「沙漠」という言葉は我々がシナから得たものである。これに相応する日本語は存しない[9]。

というのである。実は『武士道』の「序」中で、

借りものの原語で語る者は、自分の言うことの意味を解らせることができさえすれば、それで有難いと思わねばならない[10]。

といっているのである。また新渡戸は、

武士道は上述のごとく道徳的原理の掟であって、武士が守るべきことを要求されるもの、もしくは教えられたるものである。それは成文法ではない。精々、口伝により、もしくは数人の有名なる武士もしくは学者の筆によって伝えられたる僅かの格言があるに過ぎない。むしろそれは語られず書かれざる掟、心の肉碑に録されたる律法たることが多い。不言不文であるだけ、実行によって一層強き効力を認められているのである。それは、いかに有能なりといえども一人の人の頭脳の創造ではなく、またいかに著名なりといえども一人の人物の生涯に基礎するものではなく、数十年数百年にわたる武士の生活の有機的発達である[11]。

という。武士道そのものは成文法ではない。しかし、古来「武士の道」「士道」などに触れた書籍はいくつかある。例えば、いずれも江戸時代に書かれた甲州流軍学書の『甲陽軍艦』、武士の道徳を説いた山本常朝の『葉隠』、山鹿素行の『山鹿語録』、大道寺友山の『武道初心集』などである。

しかし、「武士道」という言葉が一般的になったのは、実は新渡戸の『武士道』が出版された明治後期以降のことと思われる。

5. ノーブレス・オブリージ

侍について、新渡戸は『武士道』でこう述べる。

ヨーロッパにおけるがごとく日本においてもまた、封建制が公式に始まった時、専門的なる武士の階級が自然に勢力を得てきた。これらはサムライとして知られた。（中略）漢字の「武家」もしくは「サムライ」という語も普通に用いられた。彼らは特権階級であって、元来は戦闘を職業とする粗野な素性であったに違いない。この階級は、長期間にわたり絶えざる戦闘の繰り返されているうちに、最も勇敢な、最も冒険的な者の中から自然に徴募せられたのであり、しかして淘汰の過程の進行するに伴い怯懦柔弱の輩は捨てられ、エマスンの句を借用すれば、「まったく男性的で、獣のごとき力をもつ粗野なる種族」だけが生き残り、これがサムライの家族と階級とを形成したのである。大なる名誉と大なる特権と、したがってこれに伴う大なる責任とをもつに至り、彼らは直ちに行動の共通基準の必要を感じた。ことに彼らは常に交戦者たる立場にあり、かつ異なる氏に属するものであったから、その必要は一層大であった。あたかも医者が医者仲間の競争をば職業的礼儀によって制限するごとく、また弁護士が作法を破った時は査問会に出なければならぬごとく、武士もまた彼らの不行跡についての採集審判を受くべき何かの基準がなければならなかった[12]。

ここに出てくるサムライは、原著では samurai と書かれ、「武家」もしくは「武士」は、Buke or Bushi (Fighting Knights) となっている。

『続日本紀』の養老５（721）年の条に、

文人と武士は、国家の重んずるところ[13]

と書かれているように、武士という言葉自体は、すでに奈良時代に「武官」「武人」の意味で使われていた。しかし、『武士道』で述べる武士道の主体としての武士が台頭するのは、平安時代中期の10世紀以降のことである。つまり、その頃から合戦を職業とする「つわもの（兵）」や官人貴族に仕えて警固をあずかる「さぶらい（侍）」そして、武力をもって公的に奉仕する「もののふ（武者）」が現われ、彼らを総じて「武士（さむらい）」と呼ぶようになったのである。

武士は大なる名誉と大なる特権と、さらにそれに伴う大なる責任を持つ「特権階級」であった。大切なことは、彼らが大きな特権と同時に大いなる責任を持っていたことである。これが、「高い身分に伴う義務」つまり noblesse oblige（ノーブレス・オブリージ）というものである。

武士は特権階級であるがゆえに、行動の共通基準、新渡戸の言葉で端的にいえば、「戦闘におけるフェア・プレイ」が必要であったし、そのことが武士道の確立につながったのである。

では、その行動の基準の基盤は何であろうか。新渡戸は、第１章の最後で次のように述べている。

ヨーロッパにおいてはキリスト教が、その解釈上騎士道に都合のよき譲歩を認めたにかかわらず、これに霊的素材を注入した。「宗教と戦争と名誉は、完全なるキリスト教武士の三つの魂である」とラマルティーヌは言っている。日本にも武士道の淵源たるものがいくつかあったのである[14]。

6. 武士道と宗教—むすびにかえて—

新渡戸は、日本において宗教教育に代わるものとして、「武士道」があることを示そうとして、『武士道』を執筆した。しかし、それは「武士道」と宗教が無縁であるということではない。最後に「第2章　武士道の淵源」で述べられている、「武士道と宗教」との関係を取り上げてむすびにかえたい。

第2章では、武士の生き方を支える宗教が挙げられている。まず仏教については、

運命に任すという平静なる感覚、不可避に対する静かなる服従、危機災禍に直面してのストイック的なる沈着、生を賤しみ死を親しむ心、仏教は武士道に対してこれらを寄与した[15]。

といっている。そして、

仏教の与え得ざりしものを、神道が豊かに供給した[16]。

のであり、さらに

主君に対する忠誠、祖先に対する尊敬、ならびに親に対する孝行は、他のいかなる宗教によっても教えられなかったほどのものであって、これによって武士の傲慢なる性格に服従性が付与せられた[17]。

というのである。

次に儒教は孔子の教訓であり、それは、

武士道の最も豊富なる淵源であった。君臣、父子、夫婦、長幼、ならびに朋友間における五倫の道は、経書が中国から輸入される以前からわが民族的本能の認めていたところであって、孔子の教えはこれを確認したに過ぎない[18]。

のである。

以上のように、「武士道」は、仏教、神道、孔子の教え（儒教）を起源とする、日本独自の道徳体系である。儒教の教えは特に武士道に強い影響を与えたが、これらは、それ以前から日本人が感じ取っていた道徳心の「再確認」の役割を果たしたのである。知識を得ることは手段であり、ただもの知りであることは何ら賞賛の対象とはならなかった。大切なのは、あくまでも「道徳心」であったといえる。

なお「道徳体系」を構成する、「義」「勇」「仁」「礼」「誠」「忠義」「克己」など個々の徳目が述べられている第3章以降に関する考察については、今後の課題としたい。

文　献

1）岡倉天心に関しては、次の二つの拙論を参照されたい。
岡倉天心『茶の本』における世界観—東西思想の融合—，研究紀要第47号，pp. 83－88（福島高専、2007）
岡倉天心『茶の本』における芸術観について，研究紀要第48号，pp. 51－59（福島高専、2008）
2）岬龍一郎：美しき日本人の精神 いま、なぜ「武士道」か，p. 81（致知出版社、2000）
3）『武士道』からの引用は、1900年刊のアメリカ初版（英文）を収めた下記の全集による。
南原繁他監修：新渡戸稲造全集 第十二巻，p. 7（1969，教文館）。以後、書名と頁数のみ記す。
4）『武士道』，p. 23.〔 〕内は筆者による補足。
5）『武士道』，pp. 23－24
6）『武士道』，pp. 24－25
7）セルバンテス：ドン・キホーテ 正編（一），永田寛定訳，pp. 39－40（1948，岩波文庫）
8）九鬼周造：「いき」の構造，pp. 12－13（1979、岩波文庫）
9）和辻哲郎：風土—人間学的考察—，pp. 51－52（1979，岩波文庫）
10）『武士道』，p. 8
11）『武士道』，p. 25
12）『武士道』，pp. 26－27
13）続日本紀1（東洋文庫457），直木孝次郎他訳注，p. 225（平凡社、1986）
14）『武士道』，p. 28
15）『武士道』，p. 29
16）同前。
17）同前。
18）『武士道』，pp. 31－32